

二次元ぷち文庫

蒼井村正
表紙イラストのみかみん。

魔法戦士

ルビー&サファイア

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『魔法戦士ルビー&サファイア』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



魔法戦士
ルビー&サファイア

蒼井村正
表紙／みかみん。

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

マジカルルビー あかさわあかね (朱沢茜)

普段は元気なショートカットの似合う女子校生だが、変身すると異世界からの侵略者と戦う魔法戦士となる。接近戦が得意な炎の戦士。

マジカルサファイア ひむろすずか (氷室涼香)

普段は茜の親友のお淑やかな女子校生。変身して、後方援護の得意な氷の戦士となる。長い黒髪が特徴。

まおう 魔王

人間界への侵略を企む。ブロンドの似合う美少年の容貌を持つが、その性格は冷酷。

青白い月光に照らされて、モノクロ写真のような単色に染まった深夜のビル街で、闇よりも黒い影の一群と、赤と青、二つの鮮やかな色が戦っていた。

まさに飛翔するがごとき速度で走り、数でははるかに勝る黒影の一軍を翻弄する二つの色彩は、鮮やかな原色のコスチュームをまとった少女の姿をしている。

「はっ！ ていつ！ てやあっ!!」

元気なかけ声と共に、突き、蹴りを放ち、黒い人影を蹴散らしているのは、真紅で統一された衣装姿の少女であった。コスチュームのみならず、ラフなショートカットにした髪の色も、燃えるような赤だ。瞳がクリッと大きく、あごがツンと尖った、いたずら好きの子ネコを思わせる愛らしい顔立ちをしている。やや濃い目の、きりりと凛々しい眉が印象的な、ボーイッシュな美貌の持ち主だ。

上半身は、みぞおちの辺りで大胆にカットされ、腹部からおへその辺りまでが露出した、ハーフカットサイズのベストを着用しており、下半身は細く引き締まったヒップラインにぴったりと密着した、濃赤色のスパッツ状コスチュームである。

足元は、膝の辺りまでをカバーしたレッグウォーマーが巻かれ、バスケットシューズのような、やや厚底の靴を履いていた。

その全てが、わずかに色味の違う、赤系統のカラーで統一されていた。

しなやかに躍動するその肢体は、全体的に見るとスレンダー体型だが、バストのふくら

みはなかなか見事な成長を見せている。若さゆえの張りで、重力に挑むように突出してコスチュームを押し上げた胸のサイズは、Dカップは確実にあるだろう。

突出度の高い、釣り鐘型の美乳は、大地を蹴って舞い上がり、しなやかな身体の捻りを利用して打撃を放つ少女の動きに連動して、プルプルと弾力たっぷり揺れ弾んでいる。

小振りなヒップから続く太腿はむっちりたくましく張り詰め、力強いストライドで少女を疾走させ、小柄な身体に似合わぬ、重くしなるような蹴りを繰り返させて、黒い影どもを弾き飛ばしている。

自分よりもはるかに大柄な、黒い人影の群れと勇ましく戦う彼女の名は、朱沢茜。今の姿に変身したときに名乗っている名は、マジカルビー。つい数ヶ月前までは普通の学生だったのだが、ひょんなことから、異世界の魔法を継承する魔法戦士に選ばれ、侵略者と戦うことになってしまったのである。

「こらあ！ 逃げるなっ！ 今日こそ一網打尽にしてやるっ!!」

逃げ腰になった黒影どもに追いつき、マジカルビーは背後からも容赦のない攻撃をかけている。

攻撃をクリーンヒットされた人型は、ガラスの割れるような鋭い音を立てて、微細な破片となって砕け散ってゆく。彼らは人間ではない。侵略者の頭目である魔王の影から生み出された下級戦闘員、影人であった。

「ルビー！ 一人で先行するのは危険ですわよ！」

真紅の少女の背後を守るかのように戦っていた、深いブルーのコスチューム姿の少女が声をかける。ルビーの親友にして相棒の、マジカルサファイアである。

本名は、氷室涼香。色白で、おとなしそうな顔立ちをした少女であった。身体つきも細くたおやかで、ガラス細工を思わせる、はかなさと美しさが同居している。

身にまといている衣装は、鮮やかな青で統一されたショートドレス風で、相棒のルビーと比べると露出度も少なめである。腿の半ば辺りまでの丈しかないスカートの下には、淡いブルーのスパッツを着用していた。

「わかってるって！ 援護お願いね。こらぁ！ 逃がさないぞぉ！」

サファイアの方を振り向いてウインクして見せるほどの余裕を見せ、ルビーは追撃を続ける。

「相変わらずですわね……」

小さく肩をすくめ、ため息をつきつつも、サファイアは相棒に追従して敵を追った。

長く伸ばされた艶やかな黒髪を、自らの疾走が起こした風になびかせ、青き少女は駆ける。戦いのときはいつもこういう展開になる。マジカルルビーが敵中に突入して暴れ回り、一歩離れた場所から、マジカルサファイアが遠距離攻撃で援護するのだ。

幼い頃からの親友であった二人のコンビネーションは抜群で、魔王配下の幾多の強敵を

打ち倒してきたのである。

「おりやああああつ!!」

手足の先端に深紅の炎をまとわせたルビーの攻撃が、影人の身体にヒットするたびに、黒い人影は、まるでシャボン玉が破裂するかのように弾けて消えた。

「アイスダート!」

サファイアの放つ氷の投げ矢も、ルビーを背後から襲おうとする影人どもを次々に氷結させ、粉々に打ち砕いてしまう。

魔王の影から作り出されたという雑魚どもは、一分と経たぬうちに一掃された。

「終わった……かな?」

ふうっ! と大きく息をつき、ルビーはつぶやく。

「いいえ、まだですわ!」

ルビーの隣に立ち、緊張した表情を崩さず、前方を指さすサファイア。

月光に照らされた車道の真ん中に、身長三メートルはありそうな、ごつい人影があった。一見したところでは、アニメに出てくるロボットを思わせる。

「出たなあ、機械魔人マキナグス! 今日こそスクラップにしてやる、覚悟しろっ!!」

魔王配下の大幹部、機械の肉体を持った魔人を睨み据えて、ルビーは叫ぶ。

「小癪な小娘どもめ……魔王軍の将として、負けるわけにはゆかぬ! 我が究極変身、見

せてやるわ！」

金属質のエコー音を交えた声を上げた機械魔人の姿が、急激な膨張を開始した。みるみるうちに、金属の巨人は、小山のようなサイズの巨大戦車へと変形してゆく。

直径二十センチはありそうな、巨大な砲口が、ルビーとサファイアに向けられた。

「あの姿、ヤバイよ！ 大砲撃たれる前に一気にぶっ飛ばしちやおう！」

「ええ。よくつてよ」

口速くちばやに声を掛け合い、うなずきあつた二人は、胸の前に構えた両掌の間に、魔力を収束し始めた。ルビーの掌には真紅の輝きが、サファイアの掌には青いきらめきが宿り、それがどんだん大きさと光を強めてゆく。

「貴様らごとき、轢ひき潰つぶしてくれるわあ！」

一声大きく吼えて、魔将軍が変異した巨大戦車が突進してきた。

地響きを立てて向かってくる巨体を目にしても、二人の魔法戦士に動揺は見られない。それどころか、口元には勝利を確信したかのような笑みさえ浮かんでいた。

鋼鉄の小山のごとき姿が、数メートルの距離にまで迫った瞬間、

「マジカル！」

「スパイラルッ！」

ルビーとサファイア、二人の叫びが混じり合い、掌の内で練り上げられた魔力が一気に

解き放たれた。

炎の真紅と、氷の蒼、対極の属性に位置する二つのパワーが、らせん状に絡み合ったピームとなって、巨大な敵へぶち当たる。

炎と氷、相反する属性の対消滅によって発生した巨大なエネルギーが、巨大戦車の突進パワーを相殺し、押し返す。

「ウブワアアアアアアアアアッ!!」

断末魔の声と共に、機械魔人が変異した戦車は、光に包まれて砕け散り、跡形もなく消え失せた。

「よおおしっ！ やりいいっ！」

ぐっ！ と拳を突き上げ、勝利の雄叫びを上げる深紅の魔法戦士。

「ルビー、あれを見て下さいな」

マキナグスが立っていた路地の奥に目をやり、サファイアが声をかけてくる。

「ん？ ……こんなところにも、時空の裂け目があったんだね」

ビルの壁面に、ブラックホールのように開いた黒い穴を見つめ、ルビーはつぶやく。

異次元からの侵略者である魔王の配下たちは、こうした時空の裂け目からこちら側の世界に現れるのだ。ルビーとサファイアは、侵略者たちを退けるとともに、時空の裂け目を修復する任務も与えられていた。

「ええ。さっさと塞いでしましましょう」

サファイアは、そう言うのと、魔力の収束を始めた。

先ほど使った必殺技、マジカルスパイラルのパワーを押さえて放つ空間修復技、マジカルステッチによつて、時空の裂け目を縫い閉じてしまおうというのだ。

「いや、ここは一気に攻め切っちゃおう！」

グツ、と、拳を握つて、ルビーは告げる。

「ちよつと！ 何を考えてますの!! この向こうは敵のテリトリーですよ」

「それはわかつてるよお！ でも、敵の幹部はやつつけちゃつたし、この勢いでラスボスの魔王をぶつ倒せば、万事解決つしょ？」

思いつきり本気の表情を浮かべてそう言うのと、ニツ、と不敵な笑みを浮かべて見せるルビー。

「そんなに上手くいくとは思えませんわ……第一、魔王の力もはっきりわかっていないというのに、あまりにも無謀なのでは？」

「大丈夫だつて！ 今なら魔王側の迎撃体制も整つてないだろうし、部下の大半を失つてから、ソッコータイマン勝負に持ち込めるはず。決めたつ！ あたし、行くよ！」

慎重論をとなえる親友の言葉を、勢いで押し切り、ルビーは暗黒の穴の中へと身を躍らせた。

の秘裂にめり込み、存分に擦り責めている。

ほのかな光を放っているかのような色白な下腹と、ふっくらとした丸みを帯びた恥丘を柔らかく覆った艶やかな恥毛の黒が、鮮烈なコントラストとなってルビーの目を射た。

恥毛の下、フレッシュピンクの媚粘膜を覗かせた慎ましやかなスリットを、少年魔王の勃起が存分に擦り上げ、割り開こうとしている。

ルビーが失神している間中、執拗に嬲られていたのだろう。柔らかな肉の谷間は、すでに潤みを溢れ出させている。ワレメの奥から湧き出した透明な恥液は、魔王の牡槍をぬめ光らせ、濡れた恥毛を下腹に張り付かせてしまっていた。

上半身にまとった、青いドレスの胸元も引き裂かれており、小皿を伏せたような、ささやかなバストのふくらみがあらわになっている。乳房と呼ぶにはまだ未成熟な胸乳を、少年魔王の指が這い回り、指先を突き立てるようにして、うにゆうにゆと指先を蠢かせ、揉みしだく。

ゴクリ、と無意識のうちに喉が鳴った。

男性経験のないルビーにとつて、あまりにも衝撃的な光景であるにもかかわらず、なぜか目を逸らすことができずにいる。

「いやあ！ あかねえ！ 見ないでえ！ お願いつ！ 茜には見せないでえええッ!!」

親友に見られていることを知ったサファイアは、涙の雫を振り撒き、艶やかな黒髪を振

り乱して泣き悶える。

そんな彼女の哀願など聞こえぬかのように、美少年魔王の狼藉行為は続いていた。
ぬちゅ、ぬちゅ、くちゅ……くちゅ……。

小さな粘着音を立て、淫情の血潮に強張った長大なペニスが、おそらくはまだ男性経験がないであろう少女の秘裂を擦り嬲る。

「サファイアッ!! やめろお、何してやがるんだッ! このバカ魔王ッ!!」

ハッ! と我に返ったルビーは、怒りと羞恥で顔面を朱に染めながら、男の子のような口調で叫び、暴れる。

しかし、彼女の手足も、サファイアを縛めているのと同じツタ状の触手によつて、M字開脚の姿勢で拘束されており、どんなに激しく暴れても、ビクともしなかつた。

「何って、可愛がつてあげてるのさ。招待したお客さんをもてなすのは、当然のことだろう? こうやってオマ○コを擦ってあげると、女の子はとっても悦んでくれるんだよ」

無邪気な口調とは裏腹に、美少年魔王の目には邪悪で淫蕩な光が宿っている。

股間を嬲られているサファイアは、ルビーの視線を恥じらうように顔を背け、長いまつげに涙のきらめく目を固く閉じて、わななき震えるばかりである。

必死に声を堪えてはいるが、濡れた谷間にめり込まんばかりに押しつけられた肉棒がスライドするたびに、スレンダーな肢体が、ギクッ、ビクッ、と緊張し、鼻にかかった甘い

呻きが漏れ出してしまふ。

冷静な判断でマジカルルビーをサポートし、的確な魔法の使用で、魔王の軍勢を蹴散らしてきた魔法戦士とは思えぬ、はかなく、無力で、そして淫靡な有様であった。

「さて、そろそろいいかな……」

存分に擦りまくられて濡れ開かされたサファイアの秘裂に、そそり勃つ牡槍の先端が突きつけられた。左右にそよぐ、バラの花弁のごときラヴィアを掻き分け、濡れ開いた狭間に、子供の握りこぶしほどもある亀頭がゆつくりとめり込んでゆく。

「いやああああッ!! 挿れないでえ! 挿れちゃ、ダメええええッ!!」

挿入への恐怖に絶叫し、暴れ狂うサファイア。

目の前で、親友の処女が奪い散らされようとしている非道きわまりない状況に、ルビーも意味をなさない叫びを上げて怒り悶えた。

「痛いのは最初だけだよ。じきに何もかも忘れてしまうほどの快感を与えてあげる」

秀麗な顔立ちに冷酷な笑みを浮かべ、一秒間に一センチ足らずの緩慢な速度を保って、魔王は、魔法戦士の処女孔を貫いてゆく。

ずっ! ずぶ……ずぶうううっ!

声を限りに泣き叫ぶサファイアの胎内に、魔少年の牡器官が深々と挿入された。少女の秘裂を串刺しにした勃起の胴を、深紅の血潮が一筋、伝い流れて滴った。

「か……はああ!!」

頭頂まで突き受ける破瓜の激痛に、全身を強張らせてのけぞり、声なき絶叫を放つサファイア。その肩越しに、魔王は冷たい視線をルビーに投げかけている。

「そん……な……」

目の前で親友が処女を奪われる姿を見せつけられ、ルビーは絶句している。止めどなく溢れ出す悔し涙が頬を伝い、強すぎる怒りと恐怖で、うなじがピリピリと帯電したかのように痺れている。

「キミの中、凄くよく締まるね……でも、ちよつと緊張しすぎだよ。もつとリラックスして、快感を受け入れなきやダメだな」

緩やかなストロークで腰を使いつつ、魔王は軽い口調で言った。

彼の言うとおりに、熱い肉槍で串刺しにされた少女の身体は、破瓜の苦痛とショックでガガチに硬直してしまっている。その緊張をやわらげようとでも言うのか、魔王は細い喉に舌を這わせ、両手の指で小振りなバストを愛撫する。

ツンと尖った乳先を指の腹で撫で転がし、左右から摘んでクリクリと揉み込む。

反対側の手は、汗に濡れたみぞおちから腹部を撫で下ろし、黒く艶やかな恥毛と戯れた。蜜に濡れた柔毛をひとしきり弄んだ指先は、ペニスの蹂躪を受ける秘裂の上端へと滑ってゆく。なすすべもなく見つめるルビーにも、彼の指が次に狙っているのがどこなのか、容

「おやおや、さつきからいきまくってるね。いいよ、好きだけ果るといい」
すっかり快楽の虜となった少女の身体を抱き返し、濃厚なキスを仕掛けながら、魔王は巧みなグラインドで子宮をこね回す。

絶頂に絶頂が重なり、絶え間なく痙攣する魔法戦士の子宮に、魔王の熱い進りが弾けた。
「ふう……久々に女の子の身体を堪能させてもらったよ。これからは、ボクの部下たちの相手をしてもらおうかな」

マジカルルビーのありとあらゆる穴を犯し、濃厚な精をたっぷりと注ぎ込んだ美少年魔王は、冷淡な口調で言った。

魔王の背後の闇から、いくつもの人影が近づいてくる。魔王の影から生み出された下級魔人、影人たちであった。肌の色は浅黒く、全員がほとんど同じ身長、体型をしている。石床の上にぐったりと横たわったルビーとサファイアを見据える目には、粘っこい淫情の光が宿っていた。

二人の周囲を、股間の牡器官をそそり勃たせた影人たちが取り囲む。生々しい牡臭がムツと立ちこめ、淫情にたぎった肉棒の発する熱気で、周囲の気温までもが上昇したかのようにも感じられた。

(こいつらに……犯されちゃうんだ……めっちゃめっちゃにされちゃうんだ……)

影人たちを見上げ、思う少女の背筋を、ゾクゾクッ！ と妖しい疼きが駆け抜ける。

「ルビーとサファイア、まさかこの二人を犯せるとはなあ」

「感謝しますぜ、魔王様」

二人の魔法戦士に、男どもが群がってきた。

寝てもまったく崩れない張りを見せているルビーの美豊乳に、影人どもがむしゃぶりつく。ごつい指が荒々しく乳肉を揉みしだき、マシユマロの弾力と、つきたてのモチの温もりを併せ持った、Dカッププオーバーの肉球をグニユグニユと歪めさせる。

「ふあああ！ オッパイっ！ いっ、ひゃあああああゝんっ!!」

ざらついた舌が乳首に絡み、乳肉にキリキリと歯が食い込んでくる感触さえもが、強烈な快感となって、深紅の魔法戦士に甘い声を上げさせた。

鍛え抜かれた肢体が弓なりに反り返り、ブリッジするように掲げられた腰の奥から、魔王の精液と入り混じった、濃厚な愛液が石床に滴り落ちる。

「ほおれ、もつといい声で鳴きなっ！」

浮き上がっていた細腰をガツチリと捕まえられ、一気に剛直を突き挿れられる。

ブジュッ！ と粘音を立てて、ラヴィアの狭間から魔王のスペルマが噴きこぼれ、すっかり快楽に目覚めてしまった膣壁が、陵辱者の勃起にまとわりついて歓迎した。

「うほお！ こいつはよく締まるオマ○コだなあ。さすがに魔法戦士様は、鍛え方が違
ぜ！」

歡喜の声を上げた下級魔人は、ペニスの全長をフルに使ったストロークで、甘くどろけ
たヴァギナの媚粘膜を堪能する。亀頭が抜け落ちる寸前まで腰を引き、再びゆつくりと挿
入してゆく。たくましい亀頭が膣天井側の快感スポットを残らず擦り上げ、熱く痺れるよ
うな悦波を少女の身体に送り込んできた。

Gスポットを擦られるたびに、ルビーは高い声を上げ、子宮を突き上げられるたびに、
しなやかな肢体を目一杯までのけぞらせて反応する。

左右の乳房は、興奮した影人どもによって、好き放題にしゃぶり回され、汗と唾液でぬ
め光ってこね回されている。

乳房だけではない、腹筋のシルエットが浮き出した腹部にもねっとり舌が這わされ、
へその窪みを執拗に掘り返す。左右の脇の下も吸いしゃぶられ、頬や耳にも生暖かくぬめ
ったものが這う感触があった。

全身を生臭い唾液で汚されてよがり悶えるルビーの下腹では、挿挿の速度が次第に速く
なつてゆく。腰の奥から、望まぬ絶頂の大波が沸き起こり、襲いかかってくる。

「きゃふううううんっ！」

泣くような声を上げて少女が達すると同時に、膣奥に影人のスペルマがぶちまけられた。

ドクン！ ドクンッ！ と射精の脈動が起きるたびに、ルビーの肢体も、ペニスと一体化したかのように跳ね上がる。

「いい反応しやがるぜ。おい！ 早く代われよ！」

順番待ちをしていた影人が、ペニスをギンギンにいきり勃たせて声を荒げる。

その声に急かされ、ルビーを犯していた男は、渋々といった様子で、少女の胎内から勃起を引き抜いた。

たつぷりと注ぎ込まれた精液をトロトロと嘔きこぼすピンクの秘口に、すぐさま新たな牡槍が突き込まれ、注挿を開始する。

「やっ！ らっ、らめええええっ！ くはああああ！！」

絶頂の余韻が残る膈壁を荒々しく擦りまくられ、深紅の少女は立て続けのエクスタシーへと舞い上がった。

コスチュームの残骸をまとった半裸身に群がる影人どもを、弾き飛ばさんばかりにのけぞり悶えるルビー。男どもの手がよってたかつて上半身を押しさえ込み、下腹を貫く剛直の動きをサポートする。じきに、二度目のスペルマが、少女の胎内に弾けた。

全身に荒々しい愛撫を施されて悶え狂うルビーのかたわらで、サファイアも犯されていた。細く華奢な肢体を這わせ、尻を高々と掲げた屈服のスタイルで、激しい突き込みを受

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>